

# お母さんバチ、モンタ博士、アシナガバチの巣づくり

国立市立国立第七小学校

平成29年11月2日 NO.65 (465)

3年生 「お母さんバチも働きバチも、みんなとてもよく働くんですね。」

モンタ博士 「水を巣にぬりつけてクーラーのようにするというのは、水が蒸発すると、まわりの熱をうばい、巣をひやすことができるというわけなんだよ。もちろん、羽をふるわせて扇風機のように風を送って、すずしくしてあげたりもするんだよ。ところで、下の写真を見て、何か気がつくことはないかな。」



3年生 「アシナガバチの種類がちがうようですね。」

モンタ博士 「さすが、3年生。よく気がついたね。でも、もっとかんたんなことに気づいてほしいな。」

3年生 「かんたんなこと？例えば、左はハチがたくさんいるけど、右は1匹だけとか。」

モンタ博士 「ピンポン。そのとおりさ。つまり、右はお母さんバチだけで作っている巣で、左は、子供たちが生まれて（この時はすべてメスバチ）、巣作りのお手伝いをしているというわけさ。」

3年生 「もうお母さんバチは巣を作らないの。」

モンタ博士「<sup>すづく</sup>巣作りは<sup>こども</sup>子供たちにまかせて、<sup>たまご</sup>卵を生むことに<sup>しゅうちゅう</sup>集中するんだよ。」

3年生 「そして、<sup>おお</sup>だんだんと<sup>す</sup>大きな巣になるということですね。」

モンタ博士「そして、<sup>なつ</sup>夏が<sup>おわ</sup>終わるころになると、<sup>はる</sup>春から<sup>いのち</sup>命が<sup>す</sup>けで<sup>つく</sup>巣を作ってきた<sup>かあ</sup>お母さん  
バチが<sup>し</sup>死んでしまうんだ。」

3年生 「そうすると、<sup>す</sup>巣はどうなってしまうのですか。」

モンタ博士「とても大きくなった<sup>す</sup>巣は、<sup>かあ</sup>お母さんバチの<sup>う</sup>生んだ<sup>たまご</sup>卵や<sup>ようちゅう</sup>幼虫でいっぱいさ。  
そして、<sup>はたら</sup>働きバチである<sup>むすめ</sup>娘バチたちが、<sup>のこ</sup>残された<sup>ようちゅう</sup>幼虫の<sup>せわ</sup>世話を<sup>する</sup>のさ。」

3年生 「<sup>かあ</sup>お母さんバチもえらいけど、<sup>むすめ</sup>娘バチもえらいですね。」

モンタ博士「そうだね。そして、<sup>あき</sup>秋にひとまわり<sup>おお</sup>大きなハチが<sup>う</sup>生まれ、そのハチは<sup>つき</sup>次の<sup>はる</sup>春  
に<sup>すづく</sup>巣作りをする<sup>だいじ</sup>大事なハチなんだ。」

3年生 「メスばかりなんですね。オスはいないの。」

モンタ博士「オスはね、<sup>なつ</sup>夏が<sup>お</sup>わり、<sup>あき</sup>秋になると<sup>う</sup>生まれてくるのさ。」(雌ハチの出現については、難解なのでカット)

3年生 「オスのハチも、<sup>かあ</sup>お母さんバチや<sup>むすめ</sup>娘バチと<sup>はたら</sup>みんな<sup>もの</sup>働き者なんですか。」

モンタ博士「ところがどっこい、オスはいつも<sup>あそ</sup>ぶらぶらしていて、<sup>しごと</sup>たいした仕事もしない  
で、いつも<sup>あそ</sup>だらだらと<sup>あそ</sup>遊んでばかりいるそうなんだ。」

3年生 「<sup>あそ</sup>遊んでぶらぶらばかりなの。こまったやつだな。」

モンタ博士「ところが<sup>やくめ</sup>そうでもないんだ。オスの<sup>こうび</sup>役目はねメスと<sup>こうび</sup>交尾することなんだ。」

3年生 「<sup>こうび</sup>交尾の<sup>あと</sup>後はどうなるのですか。」

モンタ博士「オスはその<sup>こ</sup>後、<sup>と</sup>ちりぢりに<sup>そだ</sup>飛びさり、メスバチを<sup>むすめ</sup>育てた<sup>つぎつぎ</sup>娘バチも  
<sup>し</sup>死んでしまい、<sup>はる</sup>春からの<sup>すづく</sup>ながい<sup>お</sup>巣作りも<sup>お</sup>終わりに<sup>なる</sup>というわけさ。」

3年生 「そして、<sup>あき</sup>秋に<sup>う</sup>生まれたメスバチだけが、<sup>もの</sup>ひっそりと<sup>き</sup>物かげや<sup>かわ</sup>木の皮のところ  
で<sup>はる</sup>春を<sup>はる</sup>じっと<sup>はる</sup>まっているということですね。」

## ウンチをしないアシナガバチの幼虫

卵が孵化して2週間ほどすると、幼虫は5令幼虫になります。やがて、カイコのように口から糸を吐いてマユを作り始めます。せまい巣の部屋の中で手も足もない幼虫が糸をはるのは、それはそれは大変な作業なのでしょう。マユの中の幼虫はその後、脱皮してさなぎになります。この時になって、初めてウンチをします。それまで一度もウンチをしなかったのは、それなりの理由があります。巣の部屋の中は狭く体の向きを変えることもできず、母バチも体を入れることができません。

その時、幼虫がウンチをし続けた場合、どうなるか想像してみるとわかります。巣の部屋はたちまちよごれてしまい、カビがはえて幼虫が病気になるてしまいます。そのため、ウンチはできるだけ体の中のため続けるしかないのです。さなぎになる前にウンチをして、脱いだばかりの幼虫時代の皮といっしょに、巣の部屋の奥に押しつけてしまうそうです。